

第5節 「位置づけられた自我」と通訳の役割 ～ 公共哲学の視点から 嶋田博子（京都大学公共政策大学院 教授）

1. 地域に刻まれた疫病の足跡

祇園祭は京都三大祭りの中でもとりわけ華やかで、国内外から多くの観光客が押し寄せ、1ヶ月にわたって大々的に催される。2020年、2021年の二年間は山鉾巡行をはじめ行事の多くが中止されたが、「疫病退散が祇園祭の本義だから」との理由で、神事は続けられた。確かにどのガイドブックにも、「平安期の869年、京都をはじめ各地で疫病が流行したときに、神泉苑に国の数と同じ66の鉾を立て、災厄の除去を祈って始まった」という趣旨のことが書かれている。ただ、そうした謂れを知っていても、祭りを見るときに、そこに込められた疫病退散への祈りに思いを馳せることは2020年になるまで筆者には一度もなかった。

改めて各地の行事を見ると、疫病退散を祈って始まったものがいかに多いかに気づく。例えば、奈良東大寺の大仏（盧舎那仏像）は天然痘などの疫病退散の祈りも込めて752年に開眼され、同じ年には修二会も始まる。皿に火を点して疫病を追い払う炎の儀式が、その原型の一つになっているという³²。

こうした例は全国に数多見られるが、1000年前以上の人々が現代の我々と同じように対処困難な病に苦しみ、日常生活を取り戻すために努力を重ねていたことを肌で感じられたのも、コロナ禍がもたらした一つの効果と言えよう。裏返せば、これほど科学技術が進歩した21世紀の社会も、未知のウィルス1つですぐに移動や交流が止まってしまう脆弱さを抱えている点では古代や中世と変わらないことに、誰もが気づくきっかけとなった。

2. 制約の再認識と「リベラル・コミュニタリアン論争」

冷戦が終結し、情報通信技術が急速に進展した1990年代頃から経済のグローバル化が進み、どの産業も厳しい国際競争にさらされるようになった。同時に、個人やビジネスにとって国境がなくなったのだから、「グローバル・スタンダード」に適応していかなければ生き残れないという主張も、日本国内で盛んになされるようになった。規制緩和、市場原理、自由競争こそが疑う余地のない善であり、行政もそうした普遍的価値の実現を目指すべきという風潮が高まった。

しかし、2020年初頭からのコロナ禍の蔓延は、国境封鎖や外出制限・ロックダウンといった強硬手段を取らざるを得ない状況に各国政府を追い込み、人々も基本的自由への制約を受け入れざるを得なかった。「グローバル」時代であつ

³² 2021年5月31日NHKスペシャル「疫病退散 千三百年の祈り～お水取り・東大寺修二会～」

<https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/blog/bl/pneAjJR3gn/bp/pG8yMNYlmX/>

でも、人は依然として物理的制約の下にあり、完全に自由にはなり得ない我が身を感じるようになった。こうした再認識は、国や自治体の行政運営にとって、どのような意味を持つだろうか。

公共哲学の演習を担当科目の一つとして受け持っている筆者がここで想起したのは、1980年代はじめの「リベラル・コミュニタリアン論争」である³³。この論争は、『正義論』(Rawls 1971)で知られるJ・ロールズに対し、コミュニタリアニズムの立場からM・サンデル(Sandel 1982)やA・マッキンタイア(MacIntyre 1981)らが批判を仕掛けたものである。宇野重規は、サンデルらの批判には最初から「行き違い」があって、実はロールズもコミュニタリアンの多くも米国の政治的文脈では中道左派＝リベラル派に属し、ともに社会的再配分を是とする立場を共有していることを指摘する(宇野 2013)。

にもかかわらずこの「論争」が興味深いのは、『善き生』は人によって多様である」と言う場合の前提として、「歴史的・社会的な属性をはぎ取られた抽象的な自己」なるものが果たして存在するののか—という問いに焦点を当てたことである。サンデルは、ロールズはそうした抽象的な自己(「負荷なき自我」)を前提としていると批判し、自らは「人間は歴史的・社会的に状況づけられて生きている」(「位置づけられた自我」)という立場に立つ(前掲宇野)。歴史や社会から切り離された人間は、いかなるものにも愛着を持たず、「自分がいかなる存在なのか」について内省することもできない。カントの道徳哲学を継承したロールズが、性別、階級、人種などの特殊条件抜きに正義の原理を導こうとして、普遍的な個人の自由と自発的な同意を重視するのに対し、サンデルはアリストテレスを継承して、「ある社会において、価値あるとされる生き方」に注目する(前掲)。

コミュニタリアンの主張に対しては、個人の自由な選択を何よりも重視するロールズとは対照的に、特定の共同体の規範を絶対視している結果、内部の差異を隠蔽抑圧する同化権力につながる恐れがある(井上 2003)などの批判がしばしば寄せられる³⁴。とりわけ米国での彼らの議論を日本の文脈にそのまま持ち込むと、村社会や会社組織で見られる年少者や女性に対する家父長的な横暴まで「共同体の美德」として正当化する議論につながりかねないことは常に念頭に置く必要がある。

ただ、「人間とは、必ずしも自分をめぐる諸関係をすべて選択できるわけではない。むしろ自分で選んだわけではない諸関係へのコミットメントこそが人間を動かす原動力であり、そのために個人は時として、複数の忠誠の間で引き裂か

³³ 詳細はムルホール・スウィフト(2007)参照。

³⁴ サンデル自身は、ある共同体において価値あるものとされるものが普遍的な原理と緊張関係に立つことがありうることも認めており、生粋のコミュニタリアンとは一線を画している(宇野 2013)。

れることもある。とはいえ、そのような葛藤こそが人間を人間にする」というサ
ンデルの主張（宇野 2013）は、旅行や海外移住に対するハードルが上がったコ
ロナ禍下で読み直すと、逆に困難に立ち向かう希望を与えてくれるようにも思
える。どんな個人や地域でも「グローバル・スタンダード」を目指せるという考
えは幻想に過ぎず、大半は大きな歴史的・社会的制約の下で生きていかざるを得
ない。ただ、個人も地域も、負荷や経緯を背負うからこそ、かけがえのない唯一
無二の存在となり得る。共同体価値の過度の強調が個人への抑圧ともなること
には留意しつつ、コロナ禍という災厄を機に、いったん立ち止まって「歴史・社
会の文脈の中での自己」を見つめ直すことは、より善き生に向けた一歩となる可
能性もある。

3. 奈良県三郷町①：「どこにでもあるベッドタウン」から「風の中のピアノ」へ

今回の研究では、日本遺産である龍田古道・龍田大社を中心にした地域の魅力
を映画で発信する事業を進めている生駒郡三郷町を訪問した（詳細は第 3 章の
報告書参照）。

調査の際には、万葉集の昔から歌に読まれた龍田神社や竜田川（大和川に合流
する）を擁する地域の歴史的由緒、世界遺産である法隆寺からの近さ、さらに、
大和と河内との結び目という交通の要所にある一方で洪水や地滑りに悩まされ
てきた大和川流域という土地柄が説明され、スケールの大きい唯一無二の魅力
を持った町であるという印象を受けた。

筆者が古典マニアであるためかもしれないが、「竜田川」と聞けばまず百人一
首の 2 首が口をつく。

●千早ぶる 神代も聞かず 龍田川 からくれなゐに 水くくるとは
（在原業平朝臣 17 番）

●嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は 龍田の川の 錦なりけり（能因法師 69 番）
いずれも散り紅葉の鮮やかさを称え、色彩豊かな情景が目の前に浮かぶ（業平
の歌は、二人の遊女と相撲取りにまつわる悲恋（？）を語る落語の「千早振る」
でもお馴染みだが）。「三郷町は平城京からみて西方なので、白虎で『秋』のコン
セプトです」という町役場の説明も、和歌が想起するイメージに申し分なく合致
する。

一方、龍田大社についての予備知識を筆者は持たなかったが、説明によれば、
第十代崇神天皇の御代、国内に疫病が流行して凶作が続いた際、「夕日の日隠る
処の龍田の立野の小野」に宮を建てよとの神託を受けて建立されたもので、その
後、疫病は退散し、豊作となったという³⁵。ここでも疫病が歴史を動かしている。

大社の境内では、難波宮から平城京へ帰ってきた宮廷歌人・高橋虫麻呂が詠ん

³⁵ 奈良寺社ガイド <https://nara-jisya.info/>（2021 年 12 月 31 日最終参照）。

だ長歌が歌碑に刻まれている。こちらは満開の桜が川面に散り敷くさまを彷彿させる春の歌である。

- 島山を い行き廻る 河副の 丘邊の道ゆ 昨日こそ吾が
越え來しか 一夜のみ 宿たりしからに 峰の上の
櫻の花は瀧の瀬ゆ 落ちて流る 君が見む その日までには
山下の風な吹きそと 打越えて 名に負へる社に 風祭せな³⁶

(万葉集 卷 9-1751)

ただ、興味深いことに、コロナ禍が始まる直前の2020年1月刊行記事「三郷町 SDGs 未来都市計画 一人にもまちにもレジリエンスなスマートシティ SANGO の実現に向けて一」(『住民と自治』)では、同町役場まちづくり推進課は「特別な何かがあるわけでもない、どこにでもあるベッドタウン」と述べている。この記事では、県内の幹線道路からも外れているため商業施設の誘致も難しいとしつつ、強調されている施策は、LTEネットワークの整備や再生可能エネルギーの導入拡大などである。いずれも重要な取り組みであるが、とり立てて特徴的なものではなく、和歌に謳われた地域の魅力も、大阪につながる地理的重要性もそこではうかがえない。

こうした対応を地元固有の魅力を前面に打ち出した映画作成事業に変容させたのが、コロナ禍による観光客の落ち込みと中学生たちの閉塞であった。外に出られない、人も来られない状況下に置かれたことが契機となって、「どこにでもあるベッドタウン」が、「大和を発った(=龍田)人が再び帰ってくる故郷」という特別な位置づけを与えられた。歴史軸と地理軸も反映され、時空を超えた明確なアイデンティティを持つものとして町が再解釈されている。ちなみに、11月の映画製作発表の時点では、「風の中のピアノ」という仮題が与えられており、風神を祭る龍田大社ゆかりの「風」がキーワードとなる模様である。

4. 奈良県三郷町②:「将来世代の人」主体の発想

他方、コミュニタリアンに対する批判にみられるように、地域文化の伝統的価値を強調しすぎることは、属する個人の自由な選択を妨げる押しつけにつながる懸念もある。

碓井敏正は、「文化にかかわる権利は、まず何よりも主流文化に対して、個人のアイデンティティを守る切り札(自由権)として位置づけられるべき」「このような権利解釈は、近代リベラリズムの個人主義的前提において可能となるものである」(碓井 2006)と論ずる。碓井は、「現代の多文化主義の代表的存在である」W・キムリッカについて、「かれは社会生活全般を規定する文化…を社会構成的文化と呼び、そのような文化が自由な選択肢を提供するとした上で、固有

³⁶ 三郷町HPによる。

の文化への帰属は、個人のアイデンティティを形成しており、もしこのような文化へのアクセスが遮断されれば、それは有意味な人生の否定を意味すると主張している」と紹介する（前掲書）。ただ、キムリッカ自身は、コミュニタリアンの共通善の政治には反対する立場で、「人々が自分の受け継いだ社会的役割に疑問を抱くのを禁ずるということは…満足のいかないあるいは抑圧的でさえあるような人生を送るよう強いることにもなりうる」との留保を付す。とはいえ、確井は、あくまでも文化の人格形成における重要性を強調するキムリッカの立場と、反省的自我に依拠しつつ、主流文化に対する批判的精神の形成を重視するリベラリズムの立場との間には重要な差異があると指摘し、それは個人抑圧性の問題で鮮明に表れるとする（前掲書）。

歴史と社会の中における共同体の在り方を考える上で、三郷町の取り組みがこの点でも興味深いのは、一貫して「将来世代の人」を主体に据える視点があることである。もともと SDGs 未来都市への選定自体、台風浸水被害をきっかけとした子ども議会による SDGs 環境未来都市宣言から始まっている。当時の小学生代表たちがいまは中学生となり、コロナ禍で修学旅行も体育祭もない無味乾燥な学校生活を余儀なくされている。思い出もないままにはいけないという町の問題意識が、教育委員会との調整を経て、中学生たちを出演させる映画作りという地域活性化事業の発想につながっている。

若い人々を主役に据える観点から事業が生じていることは、地域運営の健全さを測る上で重要な要素である。思いがけず映画出演の機会を与えられた中学生たちは、この町で生まれ育ったことを自分のアイデンティティの一部として刻みこむだろう。映画自体をまだ見たわけではないが、もし、負荷（位置づけられた自我）を個性として受け止めた各人がそれぞれの生き方を選択するというメッセージが託されているとすれば、「リベラル・コミュニタリアン論争」に対する一つの回答となっていよう。歴史軸と地理軸の中での自分の立ち位置を認識した上で、町を離れて新しい世界に挑戦するのもよし、町に留まり続け、あるいは一度離れて戻ってくるのもまたよし。地域の魅力発信が、個々の住民にとって押しつけではなくプラスに働くには何が必要を考える上でも、「子ども・将来世代主体」という取り組み姿勢は、貴重な示唆を与えてくれる。

5. むすび：新たな「集団的記憶」に向けた通訳者の役割

「集団的記憶」という概念の創始者であるM・アルヴァックスは、過去は現在の観点から選択され、記憶されると述べる（松浦 2020）。過去には多くの要素が散在するが、そのいくつかが現在の観点からまとめられ、他者に語られることで、過去から現在に至る経緯を明確に理解することも、過去について他者とコミュニケーションすることも可能になっていく（前掲書）。

この意味で、21世紀初頭のコロナ禍は、疫病に対する集団的記憶を世界中で呼び覚ます契機となった。20世紀初頭のスペイン風邪や中世のペストの流行が歴史に与えた影響が改めて語られ、カミュの『ペスト』がベストセラーになる。災厄を再び経験することで、情報溢れる忙しい日常生活の中でいかに多くの重要な教訓が埋没してきたことに初めて気づく。受け取る側が問題意識を持っていなければ、目の前にはっきり示されている情報ですら看過されることは、冒頭に述べた伝統行事に刻まれた疫病退散の祈りの例が物語っている。政治学や行政学の分野でも、現時点の特定の価値判断からスナップショット的に切り取った緻密な分析には、出発点で多くのものを見失ってしまう弱点が内包されていることが、コロナ禍を契機として改めて認識されるようになったのではないか。

我々は歴史の一部であり、我々だけが物理的制約や時代の偏見から完全に自由になることも不可能である。そうした自らの制約を謙虚に認めた上で、「先人は何を残してきたか」「先人として何を残せるか」を考えることは、SDGsの本質でもあると言えよう。外在的な制約を強調しすぎて自己選択を奪うことになってはならないが、制約に気づかず壁に頭を打ち付けることになってはいけない。そのためには、「存在するけれども見落とされている情報」を拾い上げて、一方的な押しつけにならないよう、誰もが納得する形で伝えていく通訳者が必要となる。

S・ワークマンは、情報入手が誰にとっても容易となった現在、職業公務員の強みが「情報の独占」から「最前線での情報仕分け力」に変わってきたことを指摘するとともに、人間の注意力は有限なので、重要なのは優先順位付けであると主張する（Workman 2015; Workman et al. 2010; 嶋田 2020）。コロナ禍によって「グローバル・スタンダード」の脆さが顕わになる中、それぞれの国や地域固有の優先順位付けの作業がますます大きな意味を持ちつつあることが実感されよう。

将来にバトンをつなぐ役割を担う自治体職員には、地域が背負う歴史的・地理的条件を踏まえつつ、世の中の情報の洪水の中から、何が地域の人々にとって大事かを瞬時に見分けて拾い上げ、わかりやすく伝える能力が不可欠となっている。困難な責務であるが、三郷町の取り組みには、歴史軸と地理軸で自らの位置を相対的に俯瞰する視点、将来世代から見えていま為すべきことを考える発想が表れており、いずれも優れた通訳者の資質を示す好例と言えるのではないだろうか。

【参考文献】

MacIntyre, Alasdair. 1981. *After Virtue: A Study in Moral Theory*. University of Notre Dame Press. (=マッキンタイア、A. (篠崎榮訳) 1993『美德なき時

- 代』みすず書房)
- Rawls, John. 1971. *A Theory of Justice*. Harvard University Press. (=矢島
欽次監訳 1979『正義論』紀伊国屋書店)
- Sandel, Michael. 1982. *Liberalism and the Limits of Justice*. Cambridge
University Press. (=菊池理生訳 1999『自由主義と正義の限界』三嶺書房)
- Sandel, Michael J. 1984 "The Procedural Republic and the Unencumbered
Self," *Political Theory*, Vol.12, No.1, pp.81-96.
- Workman, Samuel. 2015. *The dynamics of bureaucracy in the U.S.
government : how Congress and federal agencies process information and
solve problems*. Cambridge University Press.
- Workman, Samuel, Bryan Jones & Ashley Jochim. 2010. "Policymaking,
Bureaucratic Discretion and Overhead Democracy." In: Robert Durant (ed.).
Oxford Handbook of American Bureaucracy. Oxford University Press.
- 池上惇 2012『文化と固有価値のまちづくり』水曜社
- 井上達夫 2003『普遍の再生』岩波書店
- 碓井敏正 2006「文化権をどう理解するか」端信行・中谷武雄（編）『文化による
まちづくりと文化経済』晃洋書房 pp.65-84
- 宇野重規 2013「リベラル・コミュニタリアン論争再訪」『社会科学研究』第 64
巻 2号
- 三郷町役場まちづくり推進課 2020「三郷町SDGs 未来都市計画」自治体問題
研究所『住民と自治』1月号 pp.24-25
- 嶋田博子 2020「米国官僚制理論から日本への示唆①」人事院月報 852号 pp.30-
36
- 西村幸夫・本中眞（編）2017『世界文化遺産の思想』東京大学出版会
- 松浦雄介 2020「思想の拡張：文化遺産は誰のものか」木村至聖・森久聡（編著）
『社会学で読み解く文化遺産－新しい研究の視点とフィールド』新曜社
pp.36-61
- ムルホール、スティーヴン、アダム・スウィフト（谷澤正嗣・飯島昇蔵他訳）2007
『リベラル・コミュニタリアン論争』勁草書房